学校法人 松翠学園
滋賀文教短期大学
SHIGA BUNKYO JUNIOR COLLEGE

主体的、対話的で深い学びのある国語科の指導について
～思考力・判断力・表現力等を育成する言語活動の工夫を通して～

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2021-05-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 松宮, 孝明 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32125/00000081

主体的、対話的で深い学びのある国語科の指導について
―思考力・判断力・表現力等を育成する言語活動の工夫を通して―

松宮　孝明

抄録

学習指導要領が改訂され、新たな視点でこれからの国語科教育を行っていかなければならない。そこで、改訂の主旨を概観し、１つの学校の実践をもとに具体的に考察した。子どもたちにつけたい力や見方・考え方等を明確にし、思考力・判断力・表現力等を育成する国語科の授業を工夫することで、子どもたちの学び方が主体的、対話的で深い学びになり、学力向上につながった。

子どもたちに思考力・判断力・表現力等を育成する言語活動の工夫として、授業を１時間１時間のぶつ切りのものと考えず、「単元プランシート」をもとに構想し、単元を通してつけたい力を明確にして実践することで、非常に成果を上げた。「魅力的な単元のゴール」は子どもたちの学習意欲を高め、持続させ、豊かな相手意識のもと完了することで、相当レベルの高い成就感へとつながった。

キーワード　学習指導要領、国語科教育、主体的・対話的で深い学び、資質・能力の育成、単元全体を通した言語活動の工夫、魅力的な単元のゴール設定、つけたい力の明確化

Ⅰ　はじめに（研究の背景と主題）

学習指導要領が改訂され、新たな視点で国語科教育の改善が求められる。そこで、今回の改訂の主旨を概観し、実践研究をもとに具体的な国語科の授業改善について考察したい。今回の改訂のポイントは、大きくは以下の７項目である。

①目標構成の改善…国語科で育成する資質・能力を「国語で正確に理解し適切に表現する資質・能力」と規定し、目標を「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」の３つの柱で整理している。「言葉による見方・考え方」とは、「対象と言葉、言葉と言葉の関係を、言葉の意味、働き、使い方等に着目して捉え、その関係性を問い直して意味付けること」である。言葉への自覚を高めながら、自分の思いや考えを深めるような学習を行っていくことが期待される。

②内容の構成の改善…目標の構成に対応する形で、国語科の内容を「知識及び技能」と「思考力、判断力、表現力等」に再構成している。前学習指導要領と同様、「知識及び技能」と「思考力、判断力、表現力等」を関連させ、言語活動を通して国語の能力を身につけさせていく。この改訂は、前学習指導要領の「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」を「知識及び技能」に単に入れ替えたものではない。国語科の学習を通して育成するのに必要な知識や技能は何かという点から、知識や技能に関する指導内容を整理したものであると考える必要がある。そのうえで、「知識及び技能」と「思考力、判断力、表現力等」とを関連付けながら指導することが大切である。また、前学習指導要領の指導事項の中には、活動が前面に出ていたものも見られた。これらを資質・能力を表す指導事項に改め、指導事項と言語活動例の違いが明確になるように整理している。

③語彙指導の充実・改善…「知識及び技能」の項目に「語彙」として位置付けられた語彙指導については、小学校から中学校までの９年間を通して系統化されている。小学校では、「身近なことを表す語句」（１・２年）、「様子や行動、気持ちや性格表す語句」（３・４年）、「思考に関わる語句」（５・６年）を示して、語句を増やす対象としている。これらの語句は意味を理解するだけではなく、いずれの学年においても、話や文章の中で実際に使うことで、自分の言葉にすることを目指している。言語活動は、ともすれば、活動することに意識が向きがちである。国語科の目標にある「言葉による見方・考え方」を働かせていくためにも、言葉に着目し言葉を大切にした授業を展開して、子どもたちの語彙を量と質の両面から充実させるようにすることが大切である。

④情報の扱い方に関する指導の充実・改善…「知識及び技能」に「情報の扱い方に関する事項」が新たに設けられた。小学校においては、「共通、相違、事柄の順序」（１・２年）、「考えとそれを支える理由や事例、全体と中心」（３・４年）、「原因と結果」（５・６年）といった情報と情報の関係を学習することになる。情報と情報の関係は、前指導要領においても、例えば「事実と感想、意見などとの関係を押さえ、自分の考えを明確にしながら読んだりすること」のように３領域の指導事項に含まれている。「情報の扱い方に関する事項」は、それらを「知識及び技能」として取り出し整理したものである。また、比較や分類、図などによる関係の表し方など、情報を整理することについても指導事項が新たに設定されている。文章に書かれていることを、同じところ、違うところに分けてみたり、それらを表にまとめたりする学習は、これまでの授業でも行われている。そうした学習に含まれている情報と情報の関係の理解、情報の整理の仕方を「知識及び技能」として自覚的に取り上げ、思考したり表現したりする際に子どもたちが使えるように指導していくことが求められている。

⑤学習過程の明確化と「考えの形成」の重視…課題を自分で解決する資質・能力を育成するため、学習過程が明確になるように指導事項が設定されている。前学習指導要領においては、「話すこと・聞くこと」の領域は、「話題設定や取材」「話すこと」「聞くこと」「話し合うこと」の指導事項で構成されている。今回改訂された学習指導要領では、例えば「話すこと」については、「話題の設定、情報の収集、内容の検討」「構成の検討、考えの形成」「表現、共有」といった学習過程を明らかにした構成になっている。この学習過程の明確化は、「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」の全領域においてなされている。また、学習過程の明確化に合わせて、全領域で「考えの形成」の指導事項が設定されている。話す、聞く、書く、読む活動に取り組む中で、自分が考えたこと、伝えたいことが捉えられるように授業を工夫していくことが大切になる。

⑥我が国の言語文化に関する指導の改善・充実…前学習指導要領の「伝統的な言語文化に関する事項」が、今回改訂された学習指導要領では「我が国の言語文化に関する事項」に変更された。「我が国の言語文化に関する事項」は、「伝統的な言語文化」「言葉の由来や変化」「書写」「読書」に関する事項の４つで構成されている。

⑦漢字指導の改善・充実…「児童の日常生活及び将来の社会生活、国語科以外の各教科等の学習における必要性を踏まえ、都道府県名に用いる漢字を「学年別漢字配当表」に加えることが適当である」との中央教育審議会答申を踏まえ、都道府県名に用いる漢字 20 字を「学年別漢字配当表」の第４学年に加えている。これに伴って、第４学年、第５学年、第６学年の配当漢字が変更されている。

その他に、「学習の系統性の重視」「言語活動の創意工夫」「読書指導の改善・充実」などのポイントも重要である。

そこで、研究主題を、「主体的、対話的で深い学びのある国語科の指導について」とし、副題を「思考力・判断力・表現力等を育成する言語活動の工夫を通して」として、実践研究をもとに研究をまとめたい。

Ⅱ　研究の概要

１．研究の動機

現代の児童には、まだまだ主体的になれない、人の話に関心が持てない、人前で話すのが苦手という実態がある。よって、１つ１つの授業ではなく、単元全体を通してつけたい力を明確にし、単元全体を貫く言語活動を工夫することで主体的・対話的で深い学びができる国語科の指導を追究したい。

２．研究の目的および仮説

つけたい力を明確にし、思考力・判断力・表現力等を育成する言語活動を工夫することで、児童の学び方が主体的、対話的で深い学びになり、学力向上につながるものと考える。

Ⅲ　実践研究の方法と実際（１つの学校の１年間の校内研究の取組をもとに）

１．学校としての研究の方法

・各学年一本の研究授業の実施
・授業研究会の開催
・外部講師招聘による夏季校内研修会の実施
・年度末での研究のまとめ全体会の開催

２．学校としての研究の内容

・日々の授業における基礎基本の構想と徹底
　〇毎日の朝の学びタイムの充実
　〇ガッテンプリントの活用
　〇条件付き作文の実践
　〇読書
　〇視写プリントの活用
　〇タブレット学習
　〇ことばのたからばこの活用

・授業を仕組む際の重点項目
　〇「課題」「まとめ」「ふりかえり」カードの活用
　〇「単元プランシート」による構想
　〇「やってよかった！観てよかった！学びをつなげる笠東シート」による授業の振り返り

３．研究の実際

（１）研究計画の作成
・年度当初の校内研推進委員会にて年間計画の作成
・月１回の校内研推進委員会の開催と事前研究の実施

（２）授業計画と実践
・研究授業後の授業研究会

・「笠東シート」によるふりかえり

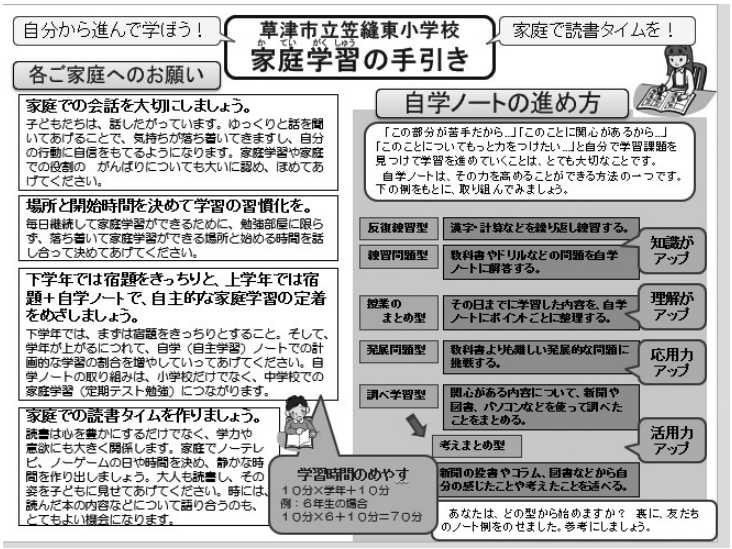
（３）年間のまとめ、成果と課題の考察

・次年度に向けての校内研推進委員会の開催

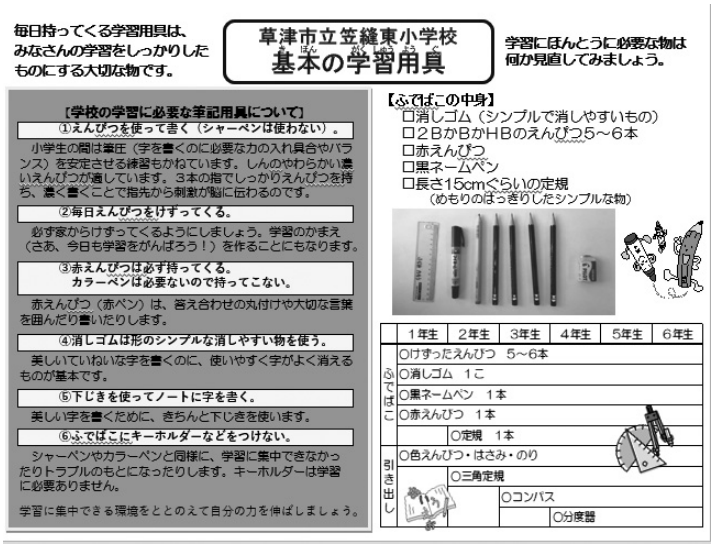
Ⅳ　考察（成果と今後の課題）

（１）日々の授業における基礎基本の徹底

①基本の学習用具と家庭学習の手引きの作成、タブレットの活用、暗唱（ことばのたからばこの活用）



・これらを、全学年、一年間を通して、統一して実践したことにより、学びの姿勢づくりに役立った。



（２）授業を仕組む際の重点項目

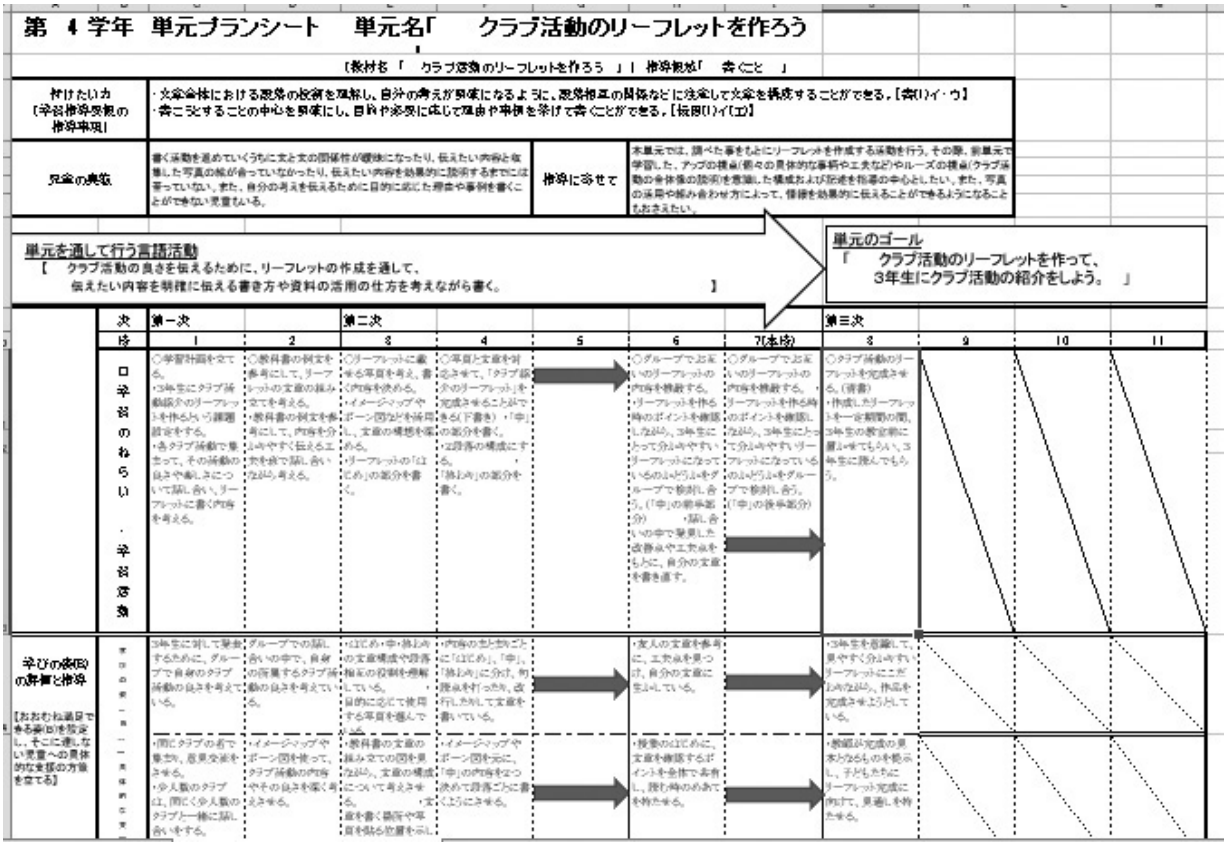
①「課題」「まとめ」「ふりかえり」カードの活用

・６年の実践から

○通例、各学校では「めあて」と言うが、本校では「課題」とし、「～だろうか、みんなで考えよう」というように、より主体的・対話的な学びにつながるようにした。一年間、全学級を通して徹底することにより、効果を上げた。

②「単元プランシート」による構想

・４年の実践から



第４学年　単元プランシート　　単元名「　クラブ活動のリーフレットを作ろう

【教材名「　クラブ活動のリーフレットを作ろう　」｜指導観点「　書くこと　」

付けたい力【学習指導要領の指導事項】	・文章全体における段落の役割を理解し、自分の考えが明確になるように、段落相互の関係などに注意して文章を構成することができる。【書(1)イ・ウ】 ・書こうとすることの中心を明確にし、目的や必要に応じて理由や事例を挙げて書くことができる。【指導(1)イ(エ)】
児童の実態	書く活動を進めていくうちに文と文の関係性が曖昧になったり、伝えたい内容と取捨した写真の絵が合っていなかったり、伝えたい内容を効果的に説明するまでには至っていない。また、自分の考えを伝えるために目的に応じた理由や事例を書くことができない児童もいる。
指導に当たって	本単元では、調べた事をもとにリーフレットを作成する活動を行う。その際、前単元で学習した、アップの視点(個々の具体的な事柄や工夫など)やルーズの視点(クラブ活動の全体像の説明)を意識した構成および記述を指導の中心としたい。また、写真の活用や組み合わせ方によって、情報を効果的に伝えることができるようになることもおさえたい。

単元を通して行う言語活動

【　クラブ活動の良さを伝えるために、リーフレットの作成を通して、
伝えたい内容を明確に伝える書き方や資料の活用の仕方を考えながら書く。　】

単元のゴール

「　クラブ活動のリーフレットを作って、
３年生にクラブ活動の紹介をしよう。　」

次	第一次		第二次					第三次			
時	1	2	3	4	5	6	7(本時)	8	9	10	11
学習のねらい・学習活動	○学習計画を立てる。 ・3年生にクラブ活動紹介のリーフレットを作るという課題設定をする。 ・各クラブ活動で集まって、その活動の良さや楽しさについて話し合い、リーフレットに書く内容を考える。	○教科書の例文を参考にして、リーフレットの文章の組み立てを考える。 ・教科書の例文を参考にして、内容を分かりやすく伝えるエ夫を探で話し合い、考える。	○リーフレットに載せる写真を考え、書く内容を決める。 ・イメージマップやボーン図などを活用し、文章の構想を深める。 ・リーフレットの「はじめ」の部分を書く。	○写真と文章を対応させて、「クラブ紹介のリーフレット」を完成させることができる(下書き)・「中」の部分を書く。 ・段落の構成にする。 「終わり」の部分を書く。		○グループでよりよいのリーフレットの内容を検討する。 ・リーフレットを作る時のポイントを確認しながら、3年生にとって分かりやすいリーフレットになっているかふり返りをグループで検討し合う。(「中」の前半部分)　・話し合いの中で発見した改善点やエ夫点をもとに、自分の文章を書き直す。	○グループでよりよいのリーフレットの内容を検討する。 ・リーフレットを作る時のポイントを確認しながら、3年生にとって分かりやすいリーフレットになっているかふり返りをグループで検討し合う。(「中」の後半部分)	○クラブ活動のリーフレットを完成させる。(清書) ・作成したリーフレットを一定期間の間、3年生の教室前に置いておくとともに、3年生に読んでもらい、3年生に読んでもらう。			
学びの姿(B)の具体と指導【おおむね通日で見る姿(B)を設定し、そこに達しない児童への具体的な支援の方策を定める】	第一次の第一時の具体的な児童										
	3年生に対して発表するために、グループで自分のクラブ活動の良さを考えている。	グループでの話し合いの中で、自分の所属するクラブ活動の良さを考えている。	・はじめ・中・終わりの文章構成や段落相互の役割を理解している。 目的に応じて使用する写真を選んでいる。	・内容の出し方・ごとに「はじめ」、「中」、「終わり」に分け、何段落を付けたか、改行したかして文章を書いている。		・友人の文章を参考に、工夫点を見つけ、自分の文章に生かしている。		・3年生を意識して、見やすく分かりやすいリーフレットにこだわりながら、作品を完成させようとしている。			
	・同じクラブの者で集まり、意見交流をさせる。 ・少人数のクラブは、同じく少人数のクラブと一緒に話し合いをする。	・イメージマップやボーン図を使って、クラブ活動の内容やその良さを深く考えさせる。	・教科書の文章の組み立ての図を見せ、文章の構成について考えさせる。 ・文章を書く場所や写真を貼る位置を示す。	・イメージマップやボーン図を元に、「中」の内容を2つ決めて段落ごとに書くようにさせる。		・授業のはじめに、文章を確認するポイントを全体で共有し、限られ時のめあてを持たせる。		・教師が完成の見本となるものを提示し、子どもたちにリーフレット完成に向けて、見通しを持たせる。			

○単元を通してつけたい力「書こうとすることの中心を明確にし、目的や必要に応じて理由や事例をあげて書くことができる」の育成のため単元全体を見通した「単元プランシート」で構想することが非常に役立った。具体的には、４年生になって初めて経験したクラブ活動について３年生に紹介するリーフレットを作るというゴールに向けて子どもたちは積極的に学習計画を立て、教科書の例文を参考に自分オリジナルのリーフレットが完成していった。

③「つけたい力の明確化」、「魅力的な単元のゴール設定」、「単元を通して行う言語活動の工夫」

・２年生の実践から

○２年生では、従来からある「スイミー」の学習で、「場面の様子に着目して登場人物の行動を具体的に想像すること」を単元を通してつけたい力とし、そのための学習計画が「スイミーの気持ちがいっぱいの劇をつくろう」という魅力的なゴール設定につながった。そして、単元を通して行う言語活動を「場面の状況を表す言葉を読み、スイミーになりきって気持ちや思いを伝えあう」ように工夫したことで、子どもたちの表現力は飛躍的に伸びた。以下に子どもたちの発言の一部を披露するが、「そうだ、ぼくが目になろう！」という言葉が、ここまで昇華された。一人ひとりが個性を発揮して、自分なりの思いを自分なりの言葉で表現できている。

子どもたちの言葉集

「みんなといっしょに大きな魚をおい出すスイミー」

○やっとならべた。あと、ぼくがはいらないと。ぼくが目になろう。だって、ぼくだけ黒色の魚だもん。赤じゃ目になれないもん。それに大きな魚をおい出して、またたのしくくらしたい。それに、もうこんな魚にきょうだいたちをうばわれたくないもん。

○うーん、どうしよう。あっそうだ。みんなは赤いから、魚の中とかまわりとかおねがい。でも、目はどうしよう。ぼくだけまっ黒だからどうしよう。あっ、ぼくが目になろう。それならきっとうまくいくはず。ぼくは大きな魚をおいだしたい。目がないと、大きな魚が見えないからね。

○ならべたけど、ばれないかなあ。ばれないようにいこう。ならべたからぼくが目になろう。そうだ、赤い魚たちは魚になって、ぼくは目になるから。みんなで魚になっておい出そう。ぼくが目になるよ。じゃあ、たいじしにいこう。大きい魚になろうよ。大きい魚になれば、たおせるよ。

○ぼくは黒いし、きょうだいたちと色がちがうんだ。ぼくが目になったら、ほんとうの魚みたいになって、大きな魚をおい出せる。力を合わせるんだ。そうじゃなきゃ、また、たべられてしまうよ。力を合わせよう。

○ぼくは、この黒の体がだいすきだから、目になろう。ぼくのすきな体が役立つかもしれない。よし、ぼく、目になろう。みんな、大きな魚みたいになってくれたんだ。ぼくもがんばろう。みんな、ぼくが目になろう。じゃあ、みんな、いくぞー！よっしゃー、大きな魚をおい出したぞ。これからいっしょにたのしくくらそう。

○れんしゅうしたから、みんな、大きな魚みたいになれてる。すごいな。よし、ぼくが目になろう。きっと、ぼくなら、黒色だしできる。それにみんなといっしょならきっとできる。ぜったいにおおきなまぐろをおい出してみんながたべられないようにするぞ。

④「単元を通して行う言語活動の工夫」

・５年生の実践から

〇現在の生活が暮らしやすいか暮らしにくいかから話題をつむぎ、５年生としてふさわしい「説得力のある文章」になるように学習を進めていった。その際、「天気を予想する」の教材文から資料の必要性に気づき、「グラフや表」を用いて友だち同士交流していく言語活動の工夫があり、非常にレベルの高い文章が仕上がった。

⑤「やってよかった！観てよかった！学びをつなげる笠東シート」による授業の振り返り

〇授業後、教員同士の授業研究会では、参観の観点を絞った「笠東シート」が非常に有効に役立った。

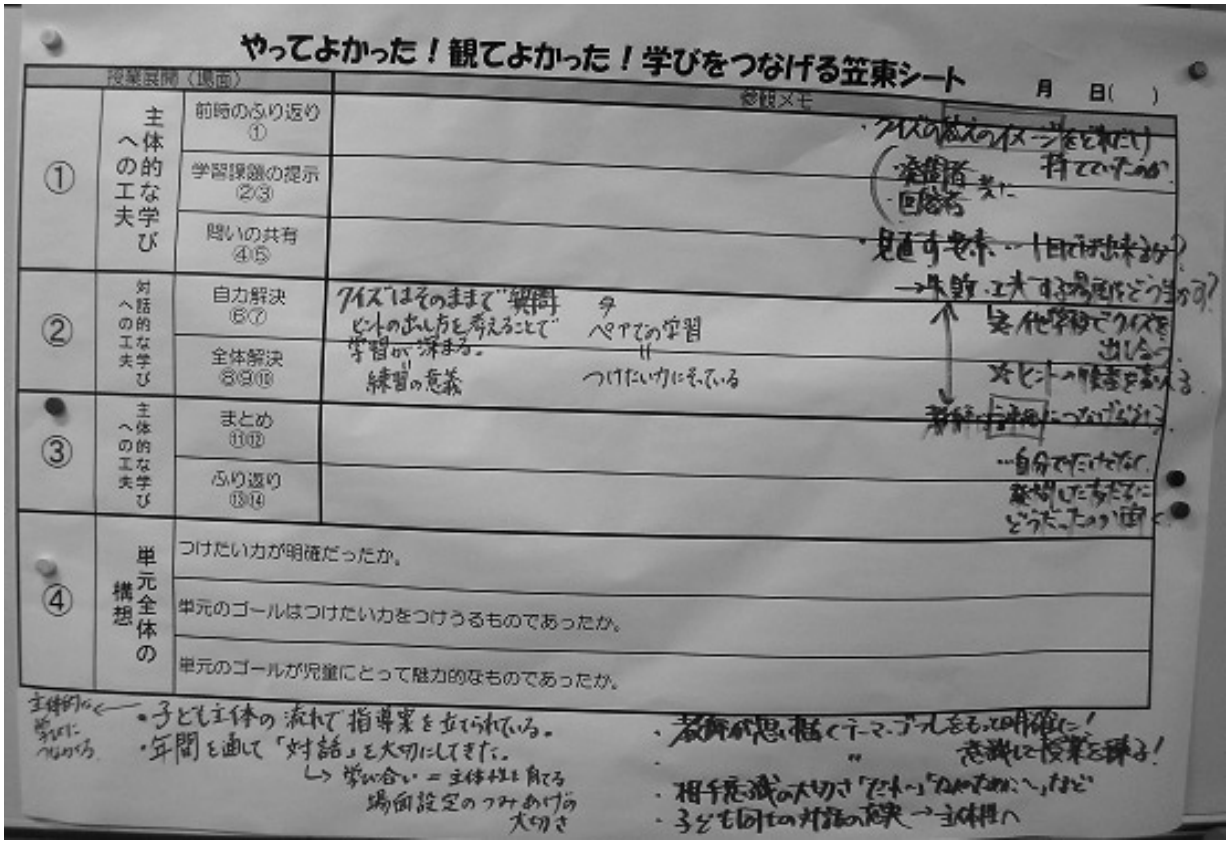
・１年生の実践から

やってよかった！観てよかった！学びをつなげる笠東シート

授業展開（場面）			主体的・対話的な学びに向けた授業の視点
①	主体的な学びへの工夫	前時のふり返り	①ノートや掲示物（模造紙や作品）をもとに、教師主導/児童同士でふり返る場面の設定がある。
		学習課題の提示	②本時のねらいの実現に向けたものとなっている。
			③学習課題は児童にとって分かりやすく、取り組みたいと思えるものである。
		問いの共有	④問いの共有（求められていること、分からないことは？）を行っている。
			⑤学習活動の流れを確認し、ゴールを教師が示している。/児童と決めている。
②	対話的な学びへの工夫	自力解決	⑥思考できる十分な時間を設定している。
			⑦自力解決に向けた支援をしている。
		全体解決	⑧課題解決のための活動を設定している。 （例：自分の考えを出し合う。共通点や相違点をまとめる。等）
			⑨課題達成に向けて進めるように、児童同士の関わり合いが行われている。
			⑩授業の全体像が分かりやすい板書になっている。
③	主体的な学びへの工夫	まとめ	⑪本時の課題に対してのゴールを児童が理解できている。
			⑫ノートをまとめるための時間を適切に設定している。 ＜低学年＞板書をうつす。板書を見て理解する。等 ＜中学年＞板書　＋　自分の考えを付け足してまとめている。等 ＜高学年＞自分の言葉で問いに対する解をまとめている。等
		ふり返り	⑬本時の学習課題を達成することができたか、友だちの考えから学んだこと、新たにやってみたいこと等が書けるように支援を行っている。
			⑭次時の学習活動への意欲づけを行っている。 （本時の頑張りを褒める。次時の学習活動を知らせる。等）

①ノートや掲示物（模造紙や作品）をもとに、教師主導／児童同士でふり返る場面の設定がある。
②本時のねらいの実現に向けたものとなっている。
③学習課題は児童にとって分かりやすく、取り組みたいと思えるものである。
④問いの共有（求められていること、分からないことは？）を行っている。
⑤学習活動の流れを確認し、ゴールを教師が示している。／児童と決めている。
⑥思考できる十分な時間を設定している。
⑦自力解決に向けた支援をしている。
⑧課題解決のための活動を設定している。
（例：自分の考えを出し合う。共通点や相違点をまとめる。等）
⑨課題達成に向けて進めるように、児童同士の関わり合いが行われている。
⑩授業の全体像が分かりやすい板書になっている。
⑪本時の課題に対してのゴールを児童が理解できている。
⑫ノートをまとめるための時間を適切に設定している。
＜低学年＞板書をうつす。板書を見て理解する。等
＜中学年＞板書　＋　自分の考えを付け足してまとめている。等
＜高学年＞自分の言葉で問いに対する解をまとめている。等

⑬本時の学習課題を達成することができたか、友だちの考えから学んだこと、
新たにやってみたいこと等が書けるように支援を行っている。
⑭次時の学習活動への意欲づけを行っている。
（本時の頑張りを褒める。次時の学習活動を知らせる。等）



○１年生の「みんなが楽しめるクイズ大会をひらこう」の実践では、14 ある観点の中から参観の観点を「③学習課題は児童にとってわかりやすく、取り組みたいと思えるものであったか」と「⑤学習活動の流れを確認し、ゴールを教師が明確に示せていたか、児童が把握できていたか」と「⑨課題達成に向けて児童同士の関わり合いが行われてたか」の３点に絞って協議した。

毎回であるが、協議の柱を絞ることで、焦点化された話し合いができた。そして、１年生の発達段階としてペアの関わり合いが有効で、年間を通して対話を大切に育ててきたことがペアでの「クイズの問題やヒントについて話して、クイズを完成していく」「クイズの答えを特定していくための質問をしたり、それに答えたりして適切にやり取りをする」に結実できていることを確認できた。

また、この「笠東シート」に、ポストイットで貼り足していくことで１時間の授業の成果や課題を明確にできた。そして、「このようにペアなどの子ども同士の対話の充実を図ることが、子どもたちに主体性をもたせることにつながるのではないか」「教師が意図的かつ効果的にそのような活動場面を設定することが、子どもたちの深い学びにつながるのではないか」などの発言からわかるように、年間を通してのテーマについて触れることができ、次年度への展望も共有できたことは、学校全体として、大きな成果であった。

Ⅴ　おわりに（研究の結論）

１. 実践研究から得られたもの

子どもたちに思考力・判断力・表現力等を育成する言語活動を工夫することで主体的、対話的で深い学びができることを目指したが、授業を１時間１時間のぶつ切りのものと考えず、「単元プランシート」をもとに構想し、単元を通してつけたい力を明確にして実践することで、非常に成果を上げた。

「魅力的な単元のゴール」は子どもたちの学習意欲を高め、持続させ、豊かな相手意識のもと完了することで、相当レベルの高い成就感へとつながった。

再掲するが、「スイミー」の実践で、２年生の児童がこのような表現に到達するというのは相当レベルの高い言語活動が行われ、深い学びになっている証拠といえよう。

「みんなといっしょに大きな魚をおい出すスイミー」

○やっとならべた。あと、ぼくがはいらないと。ぼくが目になろう。だって、ぼくだけ黒色の魚だもん。赤じゃ目になれないもん。それに大きな魚をおい出して、またたのしくくらしたい。それに、もうこんな魚にきょうだいたちをうばわれたくないもん。

○うーん、どうしよう。あっそうだ。みんなは赤いから、魚の中とかまわりとかおねがい。でも、目はどうしよう。ぼくだけまっ黒だからどうしよう。あっ、ぼくが目になろう。それならきっとうまくいくはず。ぼくは大きな魚をおいだしたい。目がないと、大きな魚が見えないからね。

○ならべたけど、ばれないかなあ。ばれないようにいこう。ならべたからぼくが目になろう。そうだ、赤い魚たちは魚になって、ぼくは目になるから。みんなで魚になっておい出そう。ぼくが目になるよ。じゃあ、たいじしにいこう。大きい魚になろうよ。大きい魚になれば、たおせるよ。

○ぼくは黒いし、きょうだいたちと色がちがうんだ。ぼくが目になったら、ほんとうの魚みたいになって、大きな魚をおい出せる。力を合わせるんだ。そうじゃなきゃ、また、たべられてしまうよ。力を合わせよう。

○ぼくは、この黒の体がだいすきだから、目になろう。ぼくのすきな体が役立つかもしれない。よし、ぼく、目になろう。みんな、大きな魚みたいになってくれたんだ。ぼくもがんばろう。みんな、ぼくが目になろう。じゃあ、みんな、いくぞー！よっしゃー、大きな魚をおい出したぞ。これからいっしょにたのしくくらそう。

○れんしゅうしたから、みんな、大きな魚みたいになれてる。すごいな。よし、ぼくが目になろう。きっと、ぼくなら、黒色だしできる。それにみんなといっしょならきっとできる。ぜったいにおおきなまぐろをおい出してみんながたべられないようにするぞ。

２．これからの国語科教育の目指すもの

①実践研究から

児童がこれまでに身につけた力を発揮して基礎学力を高め、その上にさらに高い表現力を身につけ、自信を持って活躍してくれるためには、授業のそれぞれの場面でさらに意欲的に学習活動に取り組み自信をつけていってくれることが大事である。そのためには、さらに「話したい」「聞きたい」「考えたい」を伸ばす授業を、今後も継続して創造していきたい。

②広く国語科教育の観点から

これからの国語科の授業の改善ポイントは３点である。

Point 1…学習する単元までに身につけさせてきた資質・能力を把握したうえで、育成を目指す資質・能力を明確にしておきたい。そのためには、①「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」の指導事項の中から指導のねら

いの重点化を図る。

Point ２…資質・能力を育成するための質の高い言語活動というものを強く意識し、それを位置付けた単元構成を作成したい。そのためのステップとしては、

ステップ０…子どもたちの実態（つまづき）の状況を把握する

ステップ１…指導事項（資質・能力）を明確にする
ステップ２…適切な言語事項を位置付ける
ステップ３…単元の目標、評価規準を設定する
ステップ４…単元の指導課程を構想する

Point ３…適切な単元目標、評価規準を設定し、資質・能力の定着を確認する学習評価とその方法を構想したい。また、支援を要する子どもに対する支援も具体的に適切に設定したい。

実践上の留意点…言語活動の充実のため、例えば「言語活動例」を設定したい。また、学校図書館の利活用を積極的に図りたい。「努力を要する子どもたちへの手立て」や「特別支援等の配慮を要する子どもたちへの手立て」もしっかり予想して設定したい。さらには、育成すべき資質・能力の系統性を重視し、前後の学年・学校、他教科とのつながりも踏まえ、指導に生かしたい。

松宮孝明　草津市立笠縫東小学校 校長